



令和6年度 幼児教育研修（年齢別運動あそび0・1・2歳児）
「乳児および3歳未満児の子どもの運動あそびと発達について」
日時： 2歳児 令和6年9月2日（月）15:00～17:00
会場：庁舎ホール
日時： 0・1歳児 令和6年9月6日（金）15:00～17:00
会場：足立区生涯学習センター
講師：日本体育大学 助教 河田 聖良 氏

共主体と自己決定

共主体とは、みんなが学び合う主体であること。子どもと大人の主体が「バランスよく共存、融合している主体」「互いに学び合い、共に成長し合う主体」。行動する主体は、多数のモノ（環境）とつながっている。

自己決定は主体性。子どもの自己決定が遊びの要素になる。保育者はねらいをもって子どもの探索や学びを促すように、子どもの気付きに応答的に対応したり、一緒に遊んだりして関わっていく。

今の子どもの現状 ～変化した子どもの足・体・目の使い方～

バランスがとれない

- ・足指の関節が曲がった状態の指（ハンマートウ）
- ・土踏まざる。

危険回避能力に課題

- ・転んだ時に手が出ない。
- ・ドッジボールのボールがよけられない。
- ・坂道を走り出したが止まれなくて転んだ。

直接体験の不足

基本的な体の使い方、コミュニケーション能力、社会的能力が十分に育っていない。

これらは、乳幼児期における
体験の不足・経験の不足
が関与している



運動技能の獲得の過程

乳児期で獲得される『**移動運動**』（ハイハイ、つかまり立ち、一人歩き など）が
幼児期で獲得する『**基本動作**』（立つ、しゃがむ、のぼる、おりる、スキップ、渡す、受け取る、打つ、投げる、蹴る など）のベースになっている。

基本動作が、その後に獲得されていく『**高度な運動技能**』のベースになる



動きのバリエーションを 変化させる要素

動きのバリエーションを考えてみる

例えば・・・

- ① **空間的調整**
- ② **時間的調整**
- ③ **力量的調整**



保育者はこれらの要素をうまく活用し、子どもが**運動遊びの中で経験している**「走る」「跳ぶ」「投げる」等の動作に様々な工夫をしていくことができる

- ・平均台を様々なパターンで渡る
「前を向いて早く渡る」「後ろ向きで慎重に渡る」
「カニさん歩き（横向き）で渡る」
➡質の異なる動きが体験できる。
- ・平均台の上に障害物（ボール、積み木など）を置く
➡足の運び方を調整する必要性に迫られる。（空間的調整）
- ・平均台を斜めに立てかける
➡脚にしっかりと力を込めて渡ることが要求される。（力量的調整）

やってみよう!

体を使って遊んでみよう

～ふれあいを通して体を動かすことの楽しさを味わう～

ニシン・サンマ・シャケ
クジラなど、魚の名前
を変えても遊べる。

あんたがたどこさ



いわしのひらき



- ・♪あんたがたどこさ♪のうたに合わせて左右にジャンプする。
- ・「さ」の部分で体の動きを止める。
- ・片足、前後など、動きを変化させる。

身近な素材を使って遊んでみよう

～様々な素材にふれながら五感を通して楽しむ～



京花紙を使った遊び
(吹く・吹きとばす・丸める・上に投げてキャッチなど)



カラフルシフォン(布)を
結んで大縄跳び



運動遊びを広げる要素

どのように「遊ばせようか」「遊ばせるべきか」という眼差しではなく、「いいこと思いついた!」が子どもと共にどのように見えてくるかを考えることが必要。



「いいこと思いついた!」が生まれてくるには?

- ・様々な世界と出会い
- ・関わり合うモノとの対話
- ・モノと対話を深めていく探求



そこから生まれてくる
遊びをじっくり共にし
ていくことが必要

保育者は、子どもがモノと出会い、考えていくことを支えていく。「おもしろいかな」「おもしろそうだな」と、その場にいいことが生じるような提案を出すように関わり、「いいこと思いついた」がやってくるまでのプロセスそのものを大切にする。

研修生の報告書より

子どもが自発的に体を使って遊びたいと感じるには、保育者の役割が重要であると改めて学んだ。実際に体験し、日頃から遊んでいることにアレンジを加えて変化させることで、様々な体の動きにつながっていくことに気付いた。自分の言動が子どもの意欲を失わせていないか日々振り返り、一人一人の子どもをよく見て子どもと一緒に楽しんでいくことの大切さを学んだ。

実践後



子どもが興味をもった遊びに保育者がタイミングよく関わり、一緒に遊びながらアレンジすることで、子どもたちが楽しそうに体を動かす姿が見られた。保育者がアレンジすることで、運動(動き)の幅が出て遊びも広がっていった。今までも、運動遊びはしていたが、保育者が意識をもって「運動」につなげていくことで、子どもたちの発達を促すだけでなく、楽しさが生まれ、運動への意欲につながるのだと改めて感じた。